

岡

山県北の朝鋼鷲ヶ山を源とする旭川は、県中部の吉備高原を南流し、岡山市街地を流下する一級河川である。戦国大名の宇喜多秀家が一五九七年に岡山城を築造し、城の要害化のために数百段東側を流下していた旭川を本丸の北から東へ回るように付け替えて自然の堀としたとされている。この不自然な流れの改変により城の付近がネックとなり、城下は度々洪水の被害を受けるようになった。一六五四年の大洪水を受けて、時の藩主池田光政に仕えていた熊沢蕃山が「川除けの法」を津田永忠（岡山藩の主要な土木工事を実施し、後に郡代となる）に伝えた。津田永忠は、一六六九年に城から約四キロ上流側の左岸堤防に「荒手」と呼ばれる横越流堤を築堤し、一六七〇年に荒手を越流した洪水処理のための簡易な放水路を完成させた。一六七三年と一六七四年の大洪水では、城下の浸水被害は少なかったが、放水路の堤防が脆弱であったため、荒手を越えた水が流れ込む流域は甚大な被害を受けた。その後、津田永忠は一六八六年から百間川の荒手、堤防の大改修工事に着手した。百間川へ流入した流れを緩め、土砂堆積を促すために旭川から百間川への分流地点の「一の荒手」に加えて、下流に川を横断する「二の荒手」「三の荒手」を築き三段方式の越流堤を築いた（百間川は「二の荒手」の越流堤の幅が百間（約一八〇メートル）であったことに由来する）。さらに岡山藩の財政基盤を盤石

各 人 各 説

江戸期の治水の枠組みを生かした平成の河川工事がレガシーとなる

岡山大学 大学院環境生命科学研究科 教授

前野詩朗

Shiro Maeno



にするために旭川河口から吉井川河口に至る児島湾を干拓し、約一、九〇〇ヘクタールにも及ぶ沖新田を開発した。干拓するにあたり、百間川の河口部に向かってラップ状に広がる大水尾と呼ばれる広大な遊水池を造り、児島湾に面する潮止め堤防に排水樋門を設けた。満潮時に樋門を閉じて大水尾に水を貯水し、干潮時に樋門を開けて大水尾から排水することで干拓池への塩分の侵入を防ぎ、新田のための用水を確保することに成功した。これにより百間川は洪水防衛と新田開発という相反する機能を同時に果たすこととなり、当時の土木技術の高さが伺える。

百間川は、江戸期から明治期にかけて幾多の洪水から岡山城下を守ってきたが、昭和期に入り度々大型台風による洪水被害を受けるなどしたため、一九七四年から百間川の大改修工事が始まり、一九九七年に築堤が完成し、二〇一五年に平成の河口水門が増築された。百間川への分流堰については、通常可動堰が用いられるが、「二の荒手」に現存する石積み構造物を残して、固定堰とする改築工事が現在鋭意進められている。このように平成の百間川改修では江戸期の基本的な治水の枠組みを生かしつつ新しい技術を取り入れた改修が進められており、二〇一九年に完成する予定である。平成の土木技術者が造った治水施設が数百年にわたって岡山市街地を洪水被害から守り続け、未来の人々にとって貴重なレガシーとなることを期待する。